

写本の奥書について

早稲田大学文学学術院講師 門屋 温

写本の奥書には次のような種類があります。

①著者奥書

著者が原著に記した奥書。執筆の経緯などが記してある場合が多い。自筆本であれば奥書はこれだけとなる。版本の場合も本文の最後に「何年何月何日にどこどこで誰々のために書きました」と著者の奥書が載っている場合がある。

②本奥書

写本の一番元になった原本に記されていた奥書。基本的には一番最初に書かれてる。「本云」（本に云はく）と書いてある場合も多い。

③書写奥書

書写した際の奥書。その本を書写した人が「何年何月何日、どこどこで誰々の本を写しました」と記す。本を書写する場合、書写奥書も含めて書写し、最後に自分の書写奥書を足すので、転写を繰り返してゆくといくつもの書写奥書が並ぶことになる。基本的には最後の書写奥書がその本の成立を示すことになる。

④識語

書写した後に、他の本と見比べて校訂をしたというような注記や、この本を誰それから授かったというような入手の経緯などが書き加えられている場合、奥書とは区別して識語と呼ぶ。

⑤授与記

行法等の伝受にあたって、年月日と誰（師匠）が誰（弟子）に記したことを記す。免許や許可証にあたるもので、最も重要な情報。

写本の書誌データをとる際には、この奥書がその本の成立の経緯や、伝わってきた経路を知る最も重要な手がかりとなるので、漏らさず記録することが必要です。